

満州

酷寒の地に虜われて

兵庫 稲垣 康

一、チチハルをたつて

昭和二十年十月九日、武装解除後五十二日ぶりに軟禁生活をとかれて、もとチチハル砲兵隊舎をあとにした。満州国旗にとつてかわつた青天白日旗、嘲笑するような満人の顔顔、赤軍関係の仕事をしていることを示す赤い腕章、彼等は権力にこびる民族であつた。こうして私らが失意におちいったと知ると、ざまあみろといった態度を露骨に現している。それは決して私の偏見ではなかつたと思う。

将校の帯刀は今なお許されている。敗れたりとはいえ威風堂々として、佐孝部隊長が馬で一千五百人の先頭を切つて行く。しかし私らには身に寸鉄の武器もない。前後左右は自動小銃をかかえたものしいソ連兵に監視されている。

「兵隊さんどこへ行くの」在留邦人がみえも外聞も捨てて泣きながら私らの列に飛び込んでこようとする。ソ連兵が近寄らせまいと阻止しても、彼女らは必死で抵抗している。私は胸がつまって正視できなかった。兵隊といつてもこうなつてはなんの役に立たない。しかし彼女らにしてみれば、自分らだけが残されることは、不安と恐怖でたまらない気持なのであろう。敗れたという現実はまだことにきびしい。無事に日本へ帰りなさいと心に念じながら行軍をつづけた。

外出の時いつもその家を訪問して世話になっていた佐賀県出身の親子を、もしかしたらと群衆のなかに探し求めたが、残念ながらめぐりあうことはできなかった。

強烈な太陽を浴びながらの行軍と、欲につられた装具の重さですでに十数人の落伍者をだしている。ようやくにして小民屯の自動車隊兵舎にたどりついた。落伍者はどうなったのか、私にはわからない。

鉄条網にかこまれた一角に、真っ黒によごれてぼろ服をまとった日本軍の一群がいた。最初私らは苦力クワリの集団かと思った。鉄索で区切られたその兵舎に、私らも収容されたのであるが、彼等は終戦の命令がとどかないまま最後まで交戦した結果、こうして畜生にもひとしい生活をしいられていたのである。同じ北滿に在隊しながら、このように生き方をかえられてしまう。もって生れた運命というのはあまりにも酷である。彼等は樂觀説を持たない、そして私らは帰国より重労働説にゆれ動き、今までの希望根底からくつがえされたのである。

彼等はまったく無一物で、私らの提供するものを喜んで取りあっていたが、私は気の毒にと思う半面、あまり

にも違う境遇に申しわけない思いがいっぱいであった。

翌日、私の所属部隊であった九三飛行場大隊の兵舎とりこわしの作業を命じられた。辛く苦しい思い出の一年、この兵舎で生活してきたのにと思うと感無量であり、情ない気持であった。舎内は満人がはいつたのかすでに日ばしい物は運び去られ、あれほうだいになっている。

三日目、屋根の落下で三人の重傷者が出た。外出の時は限らない喜びにはしゃぎながらトラックにゆられた道路、辛かった演習の思い出もある。果てしなく広い田畑や小さな丘、凍りつくような雪と寒風の時もあれば、焼けつくような猛暑の夏もあった。広い飛行場はすっかりさびれて、草がおい茂っている。しかしとりこわし作業を終えて帰途につくころには、あの真っ赤な大きな太陽が地平線に近づいていく。その光景だけは在隊当時と少しもかわっていなかった。

防寒被服の支給を受ける。

「シベリヤ鉄道経由で帰国させるが、途中の寒さで病気になるってはいけないから」だという。単純な奴は喜色

をみなぎらせているが、私は防寒被服を持ってあましなから、この先にながるといふのか、最悪の場合を覚悟しなければならぬことを痛感していた。

十月二十一日、まだ朝もやが立ちこめている午前三時、出発命令が出た。帰国か、はたまた重労働か。私たちは苦力クワリのような兵隊たちと別れを惜しんで、西へ向かって行軍する。三人の重傷者はどうしたのか、全然消息がわからない。思い出の衛門屯飛行場を左後方にして、ただもくもくと歩く。

榆樹屯の駅で、私らを乗せた急造二段装置の貨物列車は、そこから鉄扉を施錠して昂々溪の駅から西北上し、満州里の駅に着いた。国境の町である。深夜に加えて吹雪のためか駅頭には人影もない。牛殺しの使役が出たのち、ソ連兵の自動小銃に脅かされながら水くみにでかける。

こうして国境の町に立ってみると、行く先の不安と焦慮がつのつてくる。

どんなに乱れた内地でもやはり帰国してみたい。吹雪のやんだ夜空は星が美しかった。

「櫛の鈴さえ寂しく響く」と「国境の町」を口ずさむとたまらない郷愁に誘われる。

シベリアにはいると一段と寒気が身にしみる。満州里を経てカリムスコエから東進し、これが駅舎といえるかというようなところに停車した。

榆樹屯をたつてから何日たったのか、もうさだかでない、薪水が不足し、炊事車はお手あげで、車中の給与は当てにならなかつた。乗車前に盗んだ大豆やとうもろこしを分け合つて、青臭いのを辛抱して生かじりしてきたのである。

停車したまま動きそうもない。明かりとりの窓からのぞいてみると、人家もなく、ツンドラ地帯でまったくの無人駅である。下車を指示されて、そこから約三十キロ、国境近くへ山越えして、囚人街ダヴェンスキーで悲惨な抑留生活が始まったのである。水筒と飯ごう以外の装具はすべて没収され、毛布が一枚支給された。

二、酷寒の収容所

空腹と寒気で絶望の中で、鉱山や伐採作業に追われて何か月かたったころ、ソ連監視兵の手で関東軍恤兵部の

蓄音機が運びこまれ、最初に流されたのが「あした浜辺をさまよえば」の「浜辺の歌」であった。なんともいいようのない哀愁の念をかき立てられ、聞いている兵隊たちは寂として声なく、水を打ったような情景であった。だが次第に鼻をすする音が広がり、さながら葬儀に参列したような雰囲気があった。おさえようとしてもにじみでる涙は頬を伝っていた。流された他の曲はおぼえていないけれど、青春をかけた悲惨な抑留生活と「浜辺の歌」は生涯忘れられない私の思い出である。

伐採隊はトラックで遠くにでかける。勿論歩哨も二人同乗しているが、それを殺して全員トラックで逃亡した。黒龍江の水結が解けないうちにということであつたらしいが、河に至るまでの国境線で全員射殺され、みせしめのためか後日それらの写真が掲示された。それ以後、日本兵はなにをするか分からないと恐れられ、私らの坑道からソ連人は姿を消していった。

毎日のようにでる栄養失調死者、私の隣で起居していた四十歳近い応召兵は起こしても起きないままであつた。読経もなければ線香も花もない。そなえたくても食

物もない。つるはしても歯が立たない凍土なので、薪を燃やして土の凍結をゆるめては掘っていくが、死体を埋めるだけの穴を掘るのはなみ大抵の苦労ではなかつた。それは墓地といえるものではない。春になれば野犬などに荒らされることはひつじようである。軍服は生存者の補充にするためぬがしてしまうが、じゅばんこしたままではぐことはできなかった。

雪どけの遅い春を迎えると、草が芽ばえてくる。所内の雑草は大きくなるまでにつみとられてしまうが、周囲の板塀と鉄条網の間の雑草は踏まれぬし、格好の食糧になる。私らは手を伸ばしてそれをつんでいたが、突如、展望哨から発砲、一人おいて隣にいた兵隊が頭を打たれて即死した。私はいきた心地がせずあぜんとしていた。こんなことがあっていいのか、あまりにもなさけようしゃのないしわざである。

休日、入浴の命令が出て、街の浴場へ行く。あばら骨を数えながら久し振りの裸になる。被服は針金でしばって滅菌室へ入れられた。桶一杯の湯をもらって、全身をこするが石鹸がほしい。そこをでると腋毛等をそら

れ、豊満な女性の衛生中尉の前に立つ、剃毛したことをみてもらい、まわれ右をすると尻の筋肉をつままれる。これで栄養状態を判断するという。

滅菌された被服はもとの持ち主のところへは戻らない。員数で渡されて文句のつけようもない。私は抑留中、二度入浴を経験したが、剃毛検査をするのはいつも女性の衛生中尉であった。

俘虜用往復葉書が配布され、二、三日中に書けという。しかし書けといってもペンもなければインクもない。勿論鉛筆もない。筆記具もすべて没収しておきながらなにを使って書けというのか。

無事にいることをなんとか母に伝えたい一心で、とどくかどうか分からない葉書に挑戦したのである。炊事場の釜の尻をこそげたすず、消しずみをくだいたこな、ペーチカの灰も集めてパンカ（缶詰の空き缶）で煮つめると黒いインクらしいものがつくれた。白樺の小枝を硝子の破片でとがらすとペンになった。こちらのことは書くな、カタカナで書けという。まるで長文の電報である。私の試作インクとペンは好評で葉書を書く兵隊がふえて

いった。

復員後それが母の手もとにとどいたことをして感激した。しかもそのインクは色もあせていなかった。母は大喜びした半面、病気でしても字が書けないのではないかと心配したそうである。母と従妹が出してくれた返信は、残念ながら私の手にはとどかなかった。

三交替で昼夜兼行の坑内作業はきつい。私は体力の消耗を避けるため、トロッコにこうさくした。工具箱から板を持ち出してトロッコに乗せると、ちょうど八分目ぐらいのところには柵ができた。

そのうえに鉱石を並べるといかにも満載しているようにみえる。しかしながからで重心があがっているため脱線の連続であった。

ソ連兵の点呼には毎回泣かされる。五列縦隊に並んでいるのだから五×五で全員が分かりそうなものであるが、身も心も凍りそうな寒風のなかで、なんども数えなおしをされる時の苦痛は忘れられるものではない。

明けても暮れても実のないスूपや黒パンの小片で、私たちは常に空腹で餓鬼道におちていた。腹の皮と背中の

皮がいまにもひつつきそうである。私はすでに小物類をパンに交換していたが、ふんどしもひもを切って水あらいし、ペーチカでかわかしながらしわを伸ばして外套のうち毛皮ともどもわずかの食糧にかえた。みつければ双方罰せられるが坑道は物々交換に絶好の場所であった。毛布も半分になったし、割れば代たいたいのないメガネも食ってしまった。そのころ私は水筒をぬすまれていた。誰かがパンにかえてしまったのだろう。

よくもまああきずに食い物の話しが出るものである。蚤と南京虫になやみながら就寝までの間、またしても料理講話が始まる。

私は鉦山から建築現場へ移された。大きな建物の建設は穴をほって柱となる丸木を立てこむことから始まる。小休止の時立てた丸木が突然たおれかかった。「危ない」と叫ぶまもなく一人の兵隊がそれを頭に受けて死亡した。またしても目の前の出来ごとである。栄養失調で体の反応がにぶっているとはいえ、たおれかかる柱の方へ方へと彼はヨタヨタと逃げこんだのである。事実そのころ、足腰はガタガタで私は足をあげて二十センチぐら

いの丸太をまたぐのさえ苦難であった。

私は次第に衰弱していた。診断の結果三群を通りこしてオーカーと判定され、所内の縫製隊に編入された。これよりおちると入室になり、その後待っているのは凍土への埋葬である。軍足をほだいて糸をとり、被服のツギ当て補修をするのであるが、針金から代用縫い針をつくる方法も教えられた。作業現場へのきびしい往復歩行もなく、勿論ノルマもない。私はこの恵まれた作業場で体力が少しでも回復することを願っていた。

三、ナホトカで

昭和二十二年秋、ナホトカで私を待っていたのは病院船高砂丸であった。この海を越えなければ日本へ帰れないのだと思うと、もう少し辛抱と自分に言いかせる半面、いつ引き戻すかわからないソ連兵は勿論、気の許せない日本人に対しても、まだまだ油断はできないと自らいましめていた。

大勢の日本兵が港灣作業に従事していた。「元気で帰れよ」と励ましてくれる。親戚でもなく知人でもない。ただ日本人同志としての人情からでた言葉であろう。彼

等にいつ乗船の順番がまわってくるのか、それまで怪我や病氣しないように頑張り抜いて欲しい、と心のなかで祈っていた。

チチハルの弾薬庫に収容されていた時黄疸にたおれ、中隊の古参兵や同年兵と行動をとるにできない不安と焦慮はあったが、かえってそれが幸いであったかも知れない。古参兵と初年兵のきずなは、捕虜になってもかわらなかつたのではないか、おそらく軍隊の延長ではなかつたか、私は他隊の兵隊と年次を考えない対等のつきあいでできたのである。

四、復員して

復員して我を取り戻してからも寒気と飢えに打ちひしがれ、ソ連兵に追われている夢をいくどもみたことか。ようやく落ち着いたころ、東京のGHQから英文の呼び出し状とその翻訳文をいれた厚生省からの出頭要請がとどいた。要は米軍の情報入手活動に協力させるためであったが、真実、私は提供するだけの知識を持っていなかった。それでも四日間釘づけにされたのである。

六十三年四月、舞鶴に引揚記念館が竣工した。私はひ

かれるものを感じて、一日、妻と記念館を訪ねてみた。比較的若い見学者が多いように思ったが、彼等の表情にはなんの感慨もないようにみえた。私は陳列されている品々をみて胸が詰まったが、これを持って生還できた人は真実幸運であつたと思つた。

戦争体験の記

滋賀県 西尾 亀 三

昭和十四年二月、私は現役兵として濱江省巴彦にあつた満州第七七五部隊第一中隊軽機班に入隊した。

二月二十日、大阪に集合、迎えに来た部隊からの将校、中隊からの下士官のいんそつにより大阪港から大連に上陸、ハルピンを通過、巴彦に着いた。夜になると零下十度を越え、出入口開閉戸の金具をにぎると手からはなれないことが今も頭のなかにある。

三か月の初年兵教育のおわらぬ昭和十四年六月、ノモンハンでソ連の攻撃が始まった。大型戦車を先頭に機械